

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授承認雑誌第六二七号  
平成二十四年十一月一日発行（第百十五卷第十一号）

# ホトトギス

十一月号



## 俳句随想 〔三百六十五〕

汀子

私が怪我をして入院したことを大勢の方々からお見舞頂き恐縮致しました。

私に俳句が無かつたらとてもこんなに元気に病院生活は出来なかつたと思う。少し調子に乗り過ぎたきらいがあるが、何かにつけて俳句を作ることを楽しんだ。何もかもが俳句に結びついて何時の間にか俳句を作っていたのである。大勢の方々を助けて頂いたことも深く感謝申し上げます。

今、様々な試練と闘って居られる方もいらっしゃると思う。とても俳句どころではないと言う方もあるかと思うが、ともかく紙と鉛筆を側に置いて何でも書いて欲しい。

私は頭、肩、鎖骨、右手、両足が無事であつた。多分穴に落ちた時には全身打撲であつたと思うが、それは自然に治ると言われたので放っておく。俳句を作ることので元氣を取り戻すことを、皆様におすすめて今月の『俳句随想』に替えさせて頂きたい。

こんな所にこんな季題があつたということもいい勉強になった。

旬日記 汀子

平成二十三年十一月一日 ロイヤル俳壇

講演は蕪村に及ぶ翁の忌  
落葉掃き落葉掃き朝快晴に  
伊賀人の親しむに似て芭蕉の忌  
秋深きこと快晴につながりぬ  
旅多き秋のいつしか深きこと  
十一月三日 下萌句会

急降下 単何を見つけしより  
この辺に居る単と聞きしより  
旅三つ予定に組まれ暮の秋  
講演を終へたる家路暮の秋  
十一月五日 関西ホトギス同人会

露寒き朝の渋滞 抜けて湖  
人悼み秋惜み湖しづもれる  
今鷹の視界の中にある吾等  
湖霧を抜ける風速零の橋  
十一月六日 関西ホトギス俳句大会

よべの夢うつつか露の消ゆるほど  
快晴とまうでは言へずも露晴るほど  
十一月八日 大阪倶楽部

山茶花の散る心もて咲き初むる  
時雨雲時に素通りしてゆきぬ  
立冬の朝と思ひしだけのこと  
立冬と思へば今日の新しく  
十一月八日 綿葉倶楽部

冬ぬくきことは気がつきはじめけり  
枯葉地に橡の春秋終りけり  
又同じ話題に戻り冬ぬくし  
風道のありて枯葉の寄るところ  
十一月十日 清交社

小春日の午前が午後につながらず  
精悍な単の眼のつむりても  
湖の広さに狩の単よ  
見失ひたるより探す返り花  
話題また逸れて小春の旅仲間  
旅といふ自由な仲間 小六月  
十一月十一日 工業倶楽部

話題には話題で応へ秋惜む  
柳散るための風ある一日かな  
西の市帰りで見ゆる手の荷物  
秋惜む湖路の雨を諾へる  
秋惜む湖路のホテル十二階  
十一月十二日 九州ホトギス俳句大会前日句会

枯尾花風になき山路かな  
道迷ひぬしにはあらず枯尾花  
十一月十三日 九州ホトギス同人会  
冬の月見しかと問はれすれ違ふ  
温泉の宿の一泊二日冬ぬくし  
冬晴の朝を賜はる旅路かな  
同九州ホトギス俳句同人会

冬ぬくしもう帰路のこと思ふ旅  
会場に居て冬晴でありしこと  
十一月十五日 有恒俳句会

初時雨零して雲の消えてをり  
落葉踏む音はこまでアスファルト  
尽くすまで掃かぬつもり落葉かな  
落葉掃く人に落葉のとめどなく  
露の世に至福の手紙残さるる  
十一月十五日 無名会

初霜の踏めば応へぬ靴の音  
少子化といふ世といへど七五三  
初霜や一人住まひといふ自由  
日霜や身軽に旅にあることを  
道草の如く連れ立ち七五三  
十一月十六日 夏潮句会

十夜寺にて逢ひしてふ二人かな  
文豪の手紙露けき息遣ひ  
色褪せぬ文に師弟を偲ぶ冬  
水茎の美しき文となりぞ柿落葉  
美しき色光となりて柿落葉  
十一月十七日 きさらぎ会

快晴の旅立となる時雨の忌  
龍之介虚子宛書簡芭蕉の忌  
知らざりし苗代茱萸の花の名は  
冬霧に消されし景をつなぐ旅  
十一月十九日 中国ホトギス同人会

時雨傘たためぬ日本海日和  
迎りたる記憶の月日露けしや  
十一月二十日 中国ホトギス俳句大会  
記憶には今日深きけむ冬紅葉  
幾度も時雨れし月日引寄せて  
十一月二十一日 アサヒカルチャ

身構へし朝の寒さの息遣ひ  
枯色の増えたる帰路の錦かな  
山陰の時雨るる旅路終へしこと  
十一月二十五日 時雨句会

大根を洗ひ来し手の火照りかな  
富士見ゆる至福の冬もわが旅路  
稿債を仕上ぐるための冬籠  
十一月二十六日 句会と講演の会

先づ組鰯の解決に向け小六月  
煮崩れもおでんの味のひとつも  
十一月二十八日 「円虹」新年詠一句  
これよりの明るき未来去年今年  
十一月二十八日 「玄海」新年詠  
玄海の冬海越えて来たる風  
十一月二十九日 岡山句碑除幕  
祝ぎ心共に 祓はれ冬紅葉  
鍵の組鰯さへ小春日のこととして

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十三年十一月一日 祝「ミリーズ」一周年

秋灯や 一と年といふ輝きに

十一月二日 蕉心会

又西へ行く旅近し冬近し  
ストラヴィンスキー秋灯下に燃ゆる  
秋惜む形に咲いてゐる巷  
館一步より末枯の庭となる

紅葉散る芦屋市平田町の音  
紅葉散る君との距離をおけばなほ  
冬霞神話を秘めし湖面かな  
対岸に夢を繋いで冬霞

十一月七日 田尾治恵様送別

薦紅葉見下す高さありにけり

十一月十日 土筆会

この辺に住んでましたとうそ寒く

薄紅葉日に微笑めるほどにかな  
花八手現の風に触れ初むる

十一月四日 刈谷市民俳句大会

卓上の季題に秋を惜みけり

新幹線毎日乗つて秋うらら

十一月五日、六日関西ホトギス同人会、大会

大魼の角度に秋を惜みけり  
固まつてかたまつて初鴨の黙  
心眼や霧の向うの比良比叡

初鴨の着水に湖目覚めゆく  
プロ野球今年も終り暮の秋  
昨日より近寄つてゐる人と鴨  
魼縫うてゆく舟一つ鴨一羽

その中にもんどり打つて鴨来る  
初鴨に湖の鼓動の始まれり  
湖に命預けて鴨浮寝  
近付ける鴨と人との生活かな  
鴨増えて湖の輪郭失へり

十一月十日 カトリック新聞選者吟

十一月十一日 ひまわり俳壇選者吟

お降もめでたき色でありにけり  
十一月十三日 九州ホトギス同人会、大会

キリシタン史跡冷たく苔むして  
草枯の中に咲くもの跳べるもの  
紫を点じ枯野となりゆけり  
シーボルト歩きし道や冬うらら  
小春てふ声は温泉の町より届く  
寒灯に人悼む色ありにけり

十一月十四日 朝日カルチャー若草句会

神迎 西に東に生活あり  
末社には末社の誇り神迎  
風に聞く神迎てふ日和かな  
蓮根掘る地球の裏を探るごと  
都心にも出雲大社や神迎

十一月十五日 草木瓜会

一輪を見つけ山茶花日和かな  
冬日和明るきニューズ芦屋より  
山茶花に暮れゆく空は琥珀色  
冬日和稲城の駅に立てばなほ

山茶花や森に妖精遊ばせて  
山茶花の咲き継ぐ中の訃報かな

十一月十五日 「田虹」色紙揮毫

船出とは一人に非ず初茜

十一月十七日 登高会

切干のきりきり乾きゆく朝  
今朝の冬徒歩一里てふ日課かな  
たんぼぼの帰り花とは踏まれ易  
切干の戻し加減は風が知る  
紫は淋しき色や帰り花

十一月十九日 中国ホトギス同人会、大会

冬紅葉浜田自動車道を染め  
枯色も華やぎとして冬紅葉  
波の音冬を奏でる日本海  
冬ぬくき風に鳶乗る速さかな  
その中の一羽は鷹といふ孤高  
冬浪の色に明けゆく日本海  
石路の黄に攻められてゐる城址かな  
藤田大五郎張り夜神楽の笛

十一月二十二日 若水句会

謹んで空也念仏聞く泊り  
初霜の音乾きたる朝かな

石路の黄に心寄せ合ふ忌日寺  
石路の花城の盛衰語るかに  
初霜に朝の空気の固まれり

十一月二十四日 目黒学園句会

三の西目黒は坂の多き街  
朴落葉乾ききつたる山日和  
西の市道路狭めてをりにけり  
山の音吸ひ込んでゐる朴落葉  
朴落葉山気を絞り込んで舞ふ  
帰り花城とはなべて哀史あり

十一月二十六日 ホトギス社句会

おでん屋の鍋にも一家言ありて  
迎へたる小春のやうな講師かな  
街騒を空吸ひ込んでゐる小春  
おでん酒堅田の銘酒あればなほ  
十一月二十七日 野分会東京例会  
猫が居て鳩がゐて散紅葉かな  
十一月二十八日 新廣会岡山スクーリング  
散紅葉踏みて港の見える丘  
瀬戸内の味をふふみて牡蠣筏  
牡蠣筏ちよと揺らしゆく船の水尾  
幸福の鐘の音如何に神の留守

鷹舞ふを少しは期待したものの  
町の音吸ひ込んでゆく冬霞  
牡蠣数多乗せて海辺のバーベキュー

十一月二十九日 「旭川」七首並びに句碑建立記念祝賀会

冬日和とは句碑除幕日和かな  
吟詠に和して一羽の鴨鳴けり

# 雑詠

## 廣太郎 選

菖蒲園人の流れもできてをり 熱海 嶋田一步  
色と彩競ひあふとも花菖蒲 同  
一面といふ満開や花菖蒲 同  
春に病みいつしか蛩飛ぶ話題 長崎 石川玄能  
小型機の大旋回や雲の峰 同  
一線を画して降りし夕立かな 同  
短夜のカーテンコール続きけり 神戸 山田佳乃  
オリブの花新郎は島育ち 同  
代掻の一筆書きといふ動き 同  
たたなづく大江五峰や梅雨に入る 福知山 吉田節子  
老鶯の声に安らぐ墳墓かな 同  
万緑や丹波丹後のけぢめなく 同  
業平の駅の名消えて暮の春 静岡 須藤常央  
インフレにデフレに古茶をすすりけり 同  
空に虹地に人々の祈りあり 同  
ちんでなくちりりとこそ江戸風鈴 東京 橋本くに彦  
買はぬ人にも叩かるる西瓜かな 同  
どの路地を行くも炎帝取り仕切る 同

日蝕の金環もゆる若葉かな 福山 竹下陶子  
日輪をよぎる金星翳涼し 同  
佐比売嶺を躍りいでたる月涼し 同  
スカイツリー加へて三社祭かな 神戸 千原叡子  
誇らかに姑率先の祭鮎 同  
軒傾ぐばかり二階の祭客 同  
ひとひらを重ねてゆきぬ額の花 龍ヶ崎 今橋眞理子  
路地細る額の花咲く静けさに 同  
丸の内夜へと移りかねて夏至 同  
朝の日に金魚も水も光りけり 横浜 高浜礼子  
ただいまの声に金魚の鱗揺れて 同  
父と子の金魚水替へ手際よく 同  
入梅のころつまづきやすきかな 熊本 岩岡中正  
梅雨はげし思ひ余れるやうにかな 同  
天上へアリアのやうに花菖蒲 同  
くれなづくむ空引つぱりてほととぎす 神戸 涌羅由美  
里山の空を自在にほととぎす 同  
水の色空の色なる七変化 同  
透明を形に嵌めて海月浮く 香川 湯川 雅  
海中へ視線を足して海月追ふ 同  
蹴り応へ残らぬ脆さ梅雨菌 同  
万緑の溶けて麓の池となる 東京 大久保白村  
万緑に雨脚太き丹後かな 同  
水無月の谷の底より鳥の声 同

# 雑詠句評（十月号より）

しげ人・公次・くに彦  
仁義・比奈夫・純也  
佳乃・さい雪・雅  
一步・廣太郎

## ウエディングドレス裾引く薔薇の道 松山 中野匡子

真っ白なウエディングドレスに身を包んだ新婦が静かに薔薇の道を歩んでいる。ただそれだけのことを詠んだ一句であるが、ドレスの白が際だって眩しい。それは、色とりどりの薔薇と青空がいかにも祝福しているようであり、心地よい初夏の風が薔薇の香りを運んでくれるからである。神父の前で永遠の愛の誓いをする前の歩みなのか、それともその後の歩みなのかは分からない。しかし、誓いの後の歩みとした方が緊張感から解放された明るさと華やぎが薔薇の華やぎと相まってくるのではないかと思われる。省略の一句である。（しげ人）

この程御息が御結婚された、その喜びの一句である。親であ

れば当然喜びが勝り、句に詠むのも感情が先に立ってしまいがちであるが、そんな感情を見事に抑えて、客観的に叙す事により却って祝ぎ心が如実に現れている。季節の「薔薇」がこんなシーンにはびつたりの花である。（廣太郎）

## 鯛網を絞る瀬戸内海絞る ＊子 中村襄介

筆者の住む徳島では、瀬戸内海に面した鳴門市北灘の鯛網が有名。つぼ状の定置網を仕掛け、鯛を漁獲する方法である。以前はるを操りながらの漁であったが現在は動力化され、網を一気に船上に引き揚げる。観光用のものは舷まで引き揚げた網を開き、跳ねまわる鯛を籠網で掬って見せてくれたりもする。掲句は、鯛網がまさに舷まで引き揚げられんとする様子が活写され、臨場感のある一句となっているが、叙法については、ややパターン化された感じが無きにしても非ず、といったところがあるように思われ、惜しい気がするが如何。（公次）

広島県福山市の瀬の浦でこの「鯛網」を吟行する機会を得る事が出来た。二隻の鯛網船がお互い網を引き絞り、間合いを狭めていって、鯛を捕獲するのである。神事とも絡め、女神の舞があったり、パフォーマンスとしても優れものである。自然と人間の共存が高らかに歌い上げられている。（廣太郎）（以下略）

天地有情

退院の日も梅雨明も待たれけり  
 願ひただ母の平癒の銚粽  
 余命養へと新茶の届きたる  
 新茶一と滴の余命それでよし  
 街騒に加はつてゆくつばくらめ  
 大航海時代も今も鳥渡る  
 入院の沙汰ありてよりさみだるる  
 さみだれに沈みてあらむ吉野山  
 若かりし日の明易の稽古会  
 若き日を皆が涼しく語らるる  
 てのひらに旅の時間と樟の花  
 麦秋や一身紙のごと吹かれ  
 一天のかゞやけば散る神桜  
 今もなほ平家ほろびず余花に遇ふ  
 五月雨や天の賜る休養日  
 おはなしをせがんでばかりさみだるる  
 蝸の短き声にいよよ侘ぶ  
 若狭湾沿岸けふの夜の秋

神戸 三村純也  
 同  
 相模原 木村享史  
 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同  
 同 今井千鶴子  
 同  
 京都 安原 葉  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同  
 福山 竹下陶子  
 同  
 東京 河野美奇  
 同  
 同 稲岡 長

心子選

萍の花咲きしこと見つけたる  
 蒲の花を教はることにイチ  
 父の日の父に甘えに来たらしき  
 孫よ来よ子よ来よ貝母花ざかり  
 キャンパスの緑蔭ごとにある円居  
 盲導犬添ふ緑蔭の憩あり  
 病室の声の健やか風薫る  
 万緑の上に空あり晴れてきし  
 水無月や心一つに祈ること  
 水洩日のはらと落ちたる合歡の花  
 木洩日のはらと落ちたる合歡の花  
 水音の無き川渡る日の盛り  
 水打つて夕暮すこし匂ひけり  
 網戸先づ朝一番の風を入れ  
 忽然と山百合孤高なる山路  
 風も声も庭と往き来の網戸かな  
 底紅の一樹ゆかしく家古りぬ  
 薪能すみ匂日の松林  
 鹿屯せる緑蔭の風筋に

熱海 嶋田一步  
 同  
 神戸 後藤比奈夫  
 同  
 金沢 藤浦昭代  
 同  
 同  
 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同  
 宝塚 水田むつみ  
 同  
 東京 今井肖子  
 同  
 吹田 宮崎 正  
 同  
 箕面 井上浩一郎  
 同  
 神戸 千原叡子  
 同



# 天地有情句評

汀子

さみだれに沈みてあらむ吉野山 東京 今井千鶴子

吉野山を心に描く五月雨。

若かりし日の明易の稽古会 京都 安原 葉

忘れ得ぬ稽古会。

願ひただ母の平癒の銚粽 神戸 三村純也

銚粽に托す祈り。

新茶一と滴の余命それでよし 相模原 木村享史

せめてもと願う余命。

街騒に加はつてゆくつばくらめ 東京 稲畑廣太郎

巢立ち。

記憶の補助。

一天のかゞやけば散る神桜 福山 竹下陶子

落花の風情。

五月雨や天の賜る休養日 東京 河野美奇

雨に授かった休養の日。